

弘前大学グローバル人材育成事業

平成28年度

学生市民等協働プログラム実施報告書

韓国・仁川市における旧日本人居留地を

中心とした景観整備に関する調査研究

弘前大学教育学部住居学研究室

弘前大学グローバル人材育成事業学生市民等協働プログラム実施にあたって

韓国の仁川市には、旧日本人居住地区が住環境未整備のまま現存している地域がありますが、戦前の我が国と韓国との関係性もあり、政府も積極的な整備施策を進めてこなかった経緯があります。その事実を知った我々は、ソウルの漢陽大学で建築史を担当している富井正憲特任教授のご協力の下、仁川市中区の旧中心市街地における、戦前の建築物のリノベーションの実態を調査するとともに、区役所職員、リノベーション住宅の所有者、まちづくり関係者へのヒアリングを平成27年度に実施し、新たな観光戦略として歴史的街なみが整備されている現状と都市計画的な課題を明らかにしました。

その研究調査を、今年度は新たな観光戦略につなげるべく、しかも、単に旧日本人居留区の日式住宅の現状を調査するだけでなく、新たに開発されている新都心地区と結びつけた観光まちづくりの視点から、プログラムを進めていくこととしました。

なお、今回のプログラムに協力していただいた仁川市在住の韓重澤氏（ツアー企画会社主宰）、そして昨年度に引き続きお世話になりました戸田郁子氏に感謝するとともに、本調査に随行いただいた、旅行企画会社「たびすけ」の西谷雷佐氏、在弘の建築家である蟻塚学氏、そして下土手町商店街振興組合事務局長の宮川克己氏にお礼の言葉を贈りたいと思います。

特に、宮川氏は、ご多忙の中を第一回調査にご参加していただいたにもかかわらず、帰国3日後に急逝され、驚きを禁じ得ないとともに、その後の調査計画を考えると、学生共々途方に暮れてしまう日々でしたが、何とかプログラムを予定通り終えることができました。

ここに、生前に私のみならず、何代にもわたる研究室の学生たちが様々な場面でお世話になったことに心から感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

また最後に。このような機会を設けていただいた弘前市並びに弘前商工会議所の皆様に深く感謝いたします。

2017年3月

弘前大学教育学部 教授 北原啓司

(大学院地域社会研究科 研究科長)

弘前大学教育学部 准教授 李 秀眞

弘前大学大学院地域社会研究科 D3 村上早紀子

弘前大学大学院教育学研究科 M1 太田彩香

M1 木下香奈子

弘前大学教育学部 学部4年 榊原 亮

1. 学生市民等協働プログラム

1) 研究調査の目的

1883年の仁川港開港以降、日本人居留地が拡大し、日本人により建築や町並みが開発されていた。しかし1945年の解放以降は、日本人家屋を始めとする当時の建築物は、次々と取り壊されていくこととなった。しかし近年は、それらに近代的価値を注入しながら「敵性資産」として新たに認識し直す「近代景観保存プロジェクト」が発足し、保存に向けた動きがみられることとなり、昨年度調査ではその実態を明らかにすることができた。

そこで、本年度調査においては、昨年に引き続き修復活用（リノベーション）が進む旧日本人居留地の実態を景観整備の側面から明らかにするとともに、一方で様々な機能を集積した新市街地とのつながりとして提供されているバスツアーについて実地調査を行うとともに、仁川観光公社の公式訪問を実施し、弘前と仁川との観光交流のあり方についての意見交換を行うことを目的として実施した。



写真1 前年度に仁川市中区で調査した、空き家あるいは廃屋となって朽ちるだけの日式住宅

2) 研究調査の概要

昨年9月より今年の2月まで、4回の渡韓調査を実施したが、その日程は、以下の通りである。

① 第一次調査 平成28年9月20日～23日

本年度初参加となる西谷氏および宮川氏、学部生の榊原君とともに、仁川市中区において日式住宅リノベーションの先駆的事例として知られる官洞ギャラリーを訪問し、現在の景観まちづくりの推進状況を確認するとともに、昨年度始まっていたリノベーションプロジェクトのその後の経過を明らかにする。

② 第二次調査 平成28年11月18日～21日

北原、村上、榊原の3名により、仁川市中区で始まった新たな景観施策の調査を実施した。具体的には、中区で配布している旧日本人居留区周辺の景観マップをもとに、全物件を調査し、そのマップにも掲載されている官洞ギャラリーを再度訪問し、リノベーション家屋において展開されている美術展の見学と所有者戸田郁子氏のヒアリング調査も実施した。

③ 第三次調査 平成 28 年 12 月 6 日～12 月 9 日

第三次調査では、通訳として本学の李秀眞准教授にもご参加いただき、前述の西谷雷佐氏の協力を得て、仁川市の新都心と旧日本人居留区をつなげるバスツアーの実地調査を実施し、70 年を隔てた新旧の景観資源をつなげるツアーの実態とそれを公共交通で実施するシステムを調査した。

④ 第四次調査 平成 29 年 2 月 21 日～2 月 24 日

急逝された宮川克己氏と代わる形で、昨年度調査メンバーである建築家の蟻塚学氏に参加していただき、再度、李准教授の通訳のもと、シティバスツアーを企画し、また日本との観光交流を企画する仁川観光公社の海外マーケティングチームへのヒアリング調査を実施した。

3) 研究調査の具体的内容

(1) 仁川市中区における日式住宅のその後のリノベーション実態 (平成 28 年 9 月)

昨年度の調査において最も重要な位置づけとなった「官洞ギャラリー」は、さらに旧市街地において大きな存在感を示しながら、活用されていた。その影響は、明らかに周辺地区に飛び火しており、同じような色調のリノベ物件が、さらに増大しているようであった。



写真 2 官洞ギャラリーの隣家もギャラリー化している

本調査では、昨年度に工事中であった物件がその後どのように形を変えて、市民や観光客にとっての新たな「場所」として成立しているかを確認することとした。

最初に訪れた「場所」は、近代遺産プロジェクトの支援金を活用しリノベーションを実施した物件第 1 号として、かつては荷役会社事務所兼住宅として使用されていた町屋様式の日本人家屋を、2012 年にカフェとして改修した「pot_R」(写真 3～5) の隣家の現場であった。

「pot_R」とは、事務所として使用していた 1 階を喫茶店に、住居空間として使用していた 2 階と 3 階は、貸し会議室あるいはギャラリー空間として活用されており、一階には青森県の画家の作品が飾られ、また上階の空間は畳敷きになっており、まさに日本家屋を意識したリノベーション事例となっている。



写真3 「pot_R」外観



写真4 「pot_R」店内



写真5 「pot_R」2階の和室

一方、隣家のリノベーション工事は、すでに終了していた。現在は、二つに分割され、一方は隣家の「pot_R」と同様にカフェとして、そしてもう一方は、日本式の居酒屋に再生されていた。

官洞ギャラリーの改修オープンから派生したリノベーションのブームが、現地では依然として継続している。空き家のまま放置されていた日式家屋に対してリノベーションを取り入れた若い経営者によるカフェが次々に登場し、歴史的保全というよりも現代風に保全する動きが広まっている。それにより、近隣の資産価値や地価も上昇し続けているということである。



写真6, 7 「pot-R」に隣接する空き家のリノベーション（左 2015. 10, 右 2016. 2）

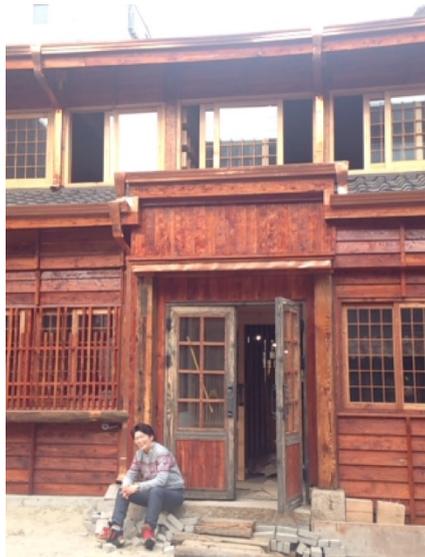


写真8, 9 改修現場で工事を見守る若い経営者と内部の改修状況（2016. 2）



写真 10, 11 完成したリノベーション建築 (2016. 9)



写真 12 「pot R」の隣に完成したリノベーション建築 (2016. 9)

このようなリノベーションの完成によって、点として存在するだけだった日式住宅のリノベーション事例が線としてつながりつつある。しかも、かつては資金的に余裕のある階層や、地域に隣接する中華街関係者による飲食店展開（主として中華料理店）が主であったが、若い経営者による新たなビジネスとして拡がりつつあることもあり、広い間口を分割する形で、複数店舗に賃貸する形態のリノベーションが登場し始めている。

同じように、昨年度調査した物件が、複数店舗の賃貸による分割形式で登場しており、今後の展開も期待できる。とはいえ、接道部分についてはテナントがすぐに決定するものの、二階部分の活用には、まだハードルがある状況にある（写真13～）。



写真13, 14 従前の風景（左2015.10、右2016.2）



写真15, 16 リノベーションの現場風景（2016.2）



写真17 リノベーションの完成風景（2016.9）



写真 18, 19 建物の半分を使ったカフェの入口



写真 20, 21 すっかり様変わりしたカフェの内部風景

(2) 仁川市中区役所による景観まちづくり施策の実態調査 (平成 28 年 11 月)

昨年度調査で明らかにしたように、仁川市中区役所では、旧市街地を対象エリアとして「近代景観保存プロジェクト」を数年前からスタートしている。前掲の「pot R」もその第一号として補助を受けたリノベーション事例となる。

このプロジェクトでは、行政（仁川市中区）が指定する顕彰施設（文化施設やギャラリー）に対して 300 万ウォン（日本円で約 30 万円）、準顕彰施設に対して 150 万ウォン（日本円で約 15 万円）の支援金が支給される。ただし、用途は商業系を対象とし、私的な住宅系は対象外である。

しかし、若干ここで問題なのは、そもそもこのプロジェクトが、観光施策の一環として行われている点である。このプロジェクトのきっかけは、旧日本人居住地区に隣接する中華街の反映を、ぜひ地域整備に活かしたいという中区役所の思惑であったという。中華街は、日本の横浜や神戸で見られる景観とほぼ同一であり、けして美しい街なみとはいえない状況にある。また、中華街

の経営者たちは、旧日本人居住地区にも進出し始めており、和風建築を模した、建築意匠的にはかなり問題のある建物が増えて起きており、このプロジェクトの資金を活かした真の景観整備の必要性が大きくなってきている状況にある。

そこで、登場しているのが、地域内の景観資産を対象としたスタンプラリーである。

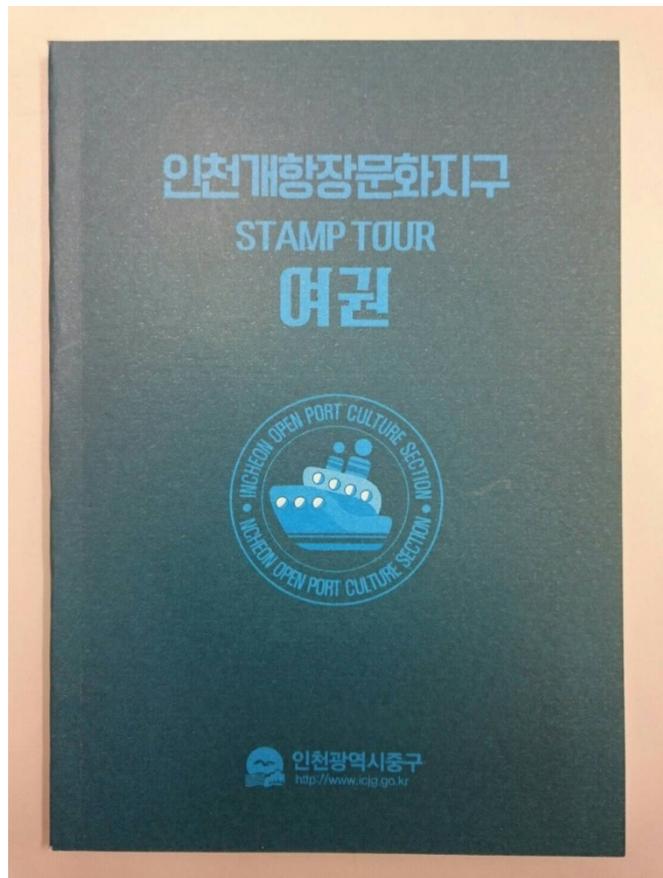


写真 22 スタンプラリー用のまち歩き手帳

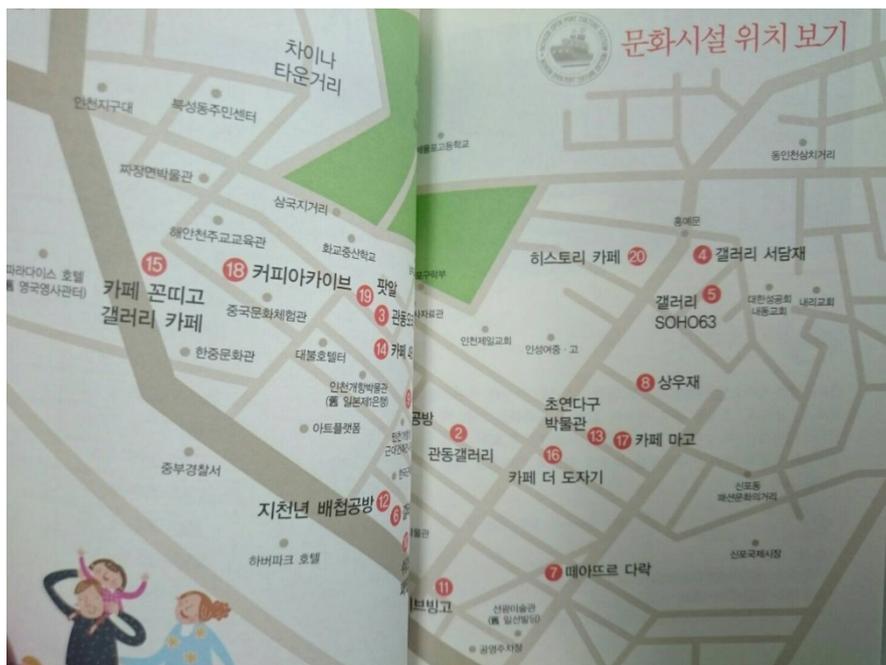


写真 23 スタンプラリーの対象に選定された 20 のリノベ物件

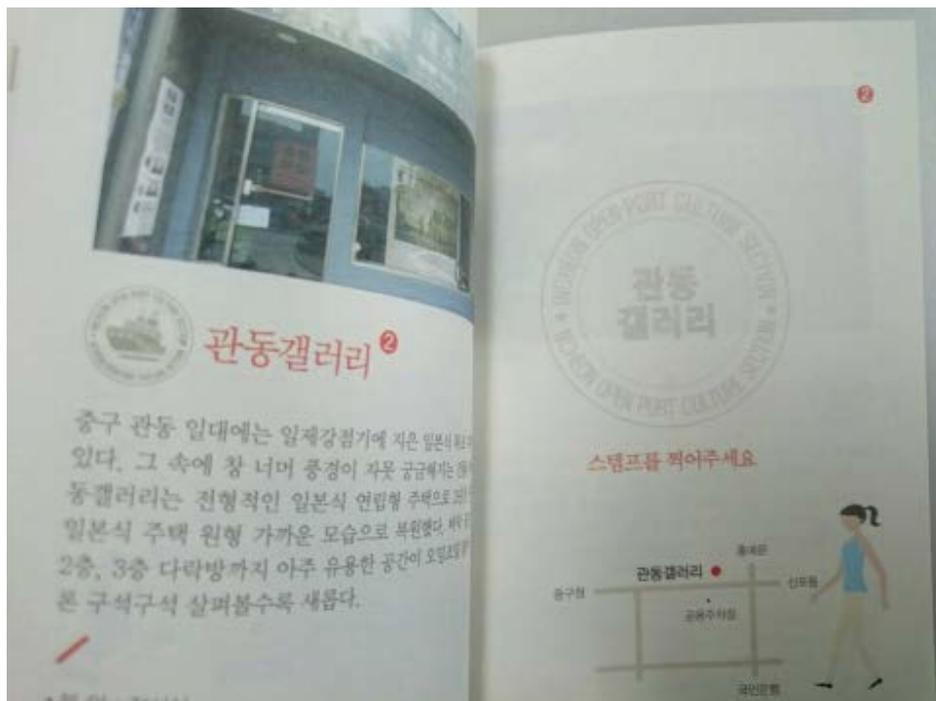


写真 24 스탬프라리手帳の見開き (左頁に写真と解説、右頁に地図とスタンプスペース)

中区では、このようなスタンプラリーを企画して、「近代景観保存プロジェクト」の成果を市民にもアピールする施策を始めており、軒先には、景観資産として認定された番号が銘板となって飾られることとなる。この銘板をマップとともに探しながら、一日近くの時間をかけて歩き回ることによって、旧日本人居住区に対するネガティブなイメージを払拭していこうとする区役所の姿勢が顕著にうかがえるものとなっている。



写真 25 戸田郁子氏所有の官洞ギャラリーの銘板 (7号認定の景観資産)



写真 26, 27 第 5 号認定されたカフェ「陶磁器」

とはいえ、区役所の思惑とは無関係に、この銘板を設置しない物件や、早くも所有者が変わってしまったために、現在の所有者が状況を飲み込めていない事例も存在しており、景観整備と言うよりも観光戦略に便乗したりノベーションブームという特徴の方が強調されている状況にある。

1883년 인천 개항 이래
130년 역사의 흔적을 간직한 역사와 문화예술이 숨쉬는 곳...

인천개항장 문화지구

- ❑ 우리 중구는 다양한 문화가 공존하는 개항장 일대의 근대적 경관을 장려하고 문화시설 및 문화편의시설을 유치하여 개항장 역사문화관광 도시로 거듭나고자 **인천개항장 문화지구로 지정**하였습니다.
- ❑ 본 사업에 참여하시는 건축주 및 운영자에게 조세감면, 용자 및 보조금 등을 지원하고 있으며 많은 관심과 참여 부탁드립니다. (※ 세부지원내용은 뒷면을 참조)
- ❑ 자세한 사항은 중구청 문화예술과(☎ 760-6474)로 연락바랍니다.

인천개항장 문화지구

문화지구 지정구역 : 537,114㎡
(신포동·동인천동·북성동 일원)

※ 건축행위에 대한 기존 법령(문화재법 및 근대건축물 밀집지역 지구단위계획)은 동일 적용됩니다.

図 1 仁川開港場周辺における近代景観保存プロジェクトの対象エリア

(3) 仁川市新都心開発と旧市街とをつなぐ観光戦略の実態

本年度調査のもう一つの主眼は、旧日本人居留区の景観整備によるイメージアップと連携する形で、現在展開されている新都心地区と旧市街地を結ぶ観光戦略の実態を知ることにある。

仁川市は、ソウルに次ぐ韓国第二の都市であり、200万人を超える人口や都市の成立過程を見るにつけ、我が国の横浜市に類似した状況にある。中華街や黄金町の古い市街地とMM（みなとみらい）21地区とを結びつける施策に通じるものとして捉えることもできる。



写真 28 仁川市の新都心として次々に開発が進む松島地区

ここで中心的役割を担うのが、シティバスツアーである。30分間隔で、仁川の新市街地と旧市街地とを仁川駅を始点として循環するバスを活用して、思い思いに仁川を楽しむことができる仕組みである。5000ウォン（約500円）の一日乗車券を買えば、どのような乗り方をしても、仁川市内を一周して回ることができる。弘前にも100円バスはあるが、観光客の時間の過ごし方を考えると、このような仕組みの方が効果的であることは間違いない。



写真 29 独特の色彩感覚の仁川シティツアーバス



写真 30 シティバスツアー専用バス停



写真 31 手首に巻く形式の一日乗車券



写真 32 シティバスツアーのマップ



写真 33 シティバスツアーに添乗する観光ボランティア

なお、運行される各バスには、一人ずつの観光ボランティアが添乗しており、場合によっては日本語でも語りかけてくれる。弘前においても十分参考にすべき方策であると考えられるし、点で待つ観光施策ではなく、線でつなぐ観光施策の導入を考えていく時代が来ていることを、あらためて痛感したのだった。

(4) 弘前市と仁川市との観光交流の新たな可能性

当初の計画では、仁川の旧市街地と新都心を結びつけるような観光戦略への提案を、研究調査協力者で仁川在住の韓重澤氏（観光プランナー）と検討することを目的としていた、韓氏の仲介により、仁川市の観光公社を公式に訪問することが可能となり、我々の2カ年にわたる調査結果をもとにしたツアー提案、また仁川から弘前を中心とした北東北の滞在型観光の可能性を検討する時間を持つことができた。

平成29年2月22日に公式訪問させていただいた仁川観光公社では、海外マーケティング部の朴廷峻部長と金閏星次長にお会いして、仕事の関係で訪韓できなかった西谷雷佐氏が作成した仁川ツアーおよび弘前市で可能なおもてなしツアーの提案を行い、意見交換をさせていただいた。



写真34 仁川観光公社におけるヒアリング（右は朴部長、左は金次長）

仁川ツアー案

現 状：仁川に立ち寄る(宿泊する)青森県人は少ない。

なぜ?：立ち寄る「理由と目的」がない。



ターゲット：韓国旅行3回目以上の独身女子旅(20代~30代)
韓国語にも興味があり、これからも訪韓する層。

キーワード：「日本家屋」「カフェ」「ジャージャー麺」
「イタリアン」「アート」「地元感ある商店街」
「人気出る前に先取りしてる私」「人と違う」
「この街にいる私、オシャレでしょ？」
「ソウルにはない、でもソウルの満足感ある街」

図2 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による仁川ツアー①

仁川ツアー案②

【食・買い物】



【アート・まちあるき】



<ポイント>

- ・日本家屋カフェを「仁川まちあるき」の拠点とし、ツアーデスク&インフォメーション機能を併設する。観光客も地元人も集うコミュニティスペースに。イベント開催。
- ・日本語を勉強中等の地元女子がガイド案内する。
- ・「韓国旅行の1泊は仁川」⇨女子会宿泊プランの設定



図3 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による仁川ツアー②

収穫体験以外で「りんごツーリズム」をストーリー化



⇨りんご剪定体験

どの枝を切り、どの枝を残すか。その切り方でりんごの味の7割が決まる。農家の哲学と道具への想いを体験する。

【参加費：おひとり様4,000円】

手ぶらで観桜会⇨

弘前の桜が美しいのは、その管理方法に「りんごの剪定技術」が応用されているから。満開の桜の木の下で、地元食材と地酒を満喫。忍者があなたをおもてなし致します。

【参加費：おひとり様30,000円】



図4 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による弘前体験ツアー①

りんご畑という「場所」をエンターテイメント化



⇐バゲ the ride

軽トラックの屋根を切り落とした、りんご畑の作業車が通称「バゲ」。おいしさに必要な枝が車の通行を遮った時、青森のりんご農家は枝ではなく車の屋根を切る。「りんご畑のオープンカー」は大人から子供まで大人気。

【参加費：おひとり様4、000円】

りんご畑でグランピング⇨

りんご畑でグランピング！夕食は地元食材のビュッフェ形式。夜はシールドを飲みながらりんご畑で映画観賞。朝はヨガも楽しめます。

【参加費：おひとり様30、000円〜】



図5 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による弘前体験ツアー②

何気ない日常の暮らしぶりが観光コンテンツ①



⇐津軽ひろさき雪かき検定

地元人はうんざりする冬の雪かき。しかしこの雪かきを「楽しい」と思う人もいる。スキルに応じて認定証を贈呈。ホットアップルジュース付き。地域課題を観光客が解決する観光コンテンツ。

【参加費：おひとり様3、000円】



⇐大人の本気のそり遊びツアー

ソリを背負って雪山に登ろう！約1時間で山頂に到着。温かいコーヒーで一息。あとはひたすら雪山を滑り降りるのみ！終了後は煮干中華の昼食と温泉入浴付き。

【参加費：おひとり様9、000円】

図6 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による弘前体験ツアー③

何気ない日常の暮らしぶりが観光コンテンツ②



◀津軽美人スナック巡り

知らない街のスナックの扉を開けるのは勇気が必要。そんな時は地元ガイドが美人ママのお店をご案内！スナック3軒をはしご酒。

【参加費：おひとり様8、000円】



◀弘前ねぶた解体体験

運行が終わった後のねぶたを解体体験！綺麗に切り取った部分はお土産にどうぞ。デザイン・クラフト関係の方に大人気！ねぶた製作体験・ねぶた参加ツアーもあります。

【参加費：おひとり様4、000円】

図7 西谷雷佐氏（たびすけ）提案による弘前体験ツアー④

ツアー提案については、非常に好評であり、特に弘前訪問の意志を表明していただき、今後の弘前と仁川との観光交流の可能性が広がる思いであった。

しかも、西谷氏、あるいは昨年度調査に同行していただいた坂本崇氏らが中心となって活動している弘前路地裏探偵団に強い興味を持っていただき、仁川でもそのような活動を進めていきたいとの意見であった。実際に昨年度の訪韓時に仁川市中区の観光部局を訪問した際にプレゼントして路地裏探偵団のステッカーは、一年経過した今でも、建物の入り口近くに掲示されており、関心の強さがうかがえた。



写真35 観光部局入口に張られた路地裏探偵団のステッカーを撮影する西谷氏

3. まとめ

今回の事業では、当初、仁川在住の観光プロデューサーである韓重澤氏にご協力いただき、西谷氏および故宮川氏と新たな観光交流の議論を深めていただく予定であったが、思いがけず仁川観光公社を公式訪問させていただくこととなり、しかも結果的に海外マーケティング部との意見交換をさせていただいたことが幸運であった。

そこで、とんとん拍子に話が決まり、平成 29 年 3 月上旬には、弘前商工会議所の清藤哲夫会頭と弘前観光協会の三上千春会長、そして前掲の坂本崇事務局長が、仁川観光公社を公式訪問し、公社のトップとも会談することにつながった。

今後、弘前と仁川との交流が多面的に展開してされていくことが期待され、我々研究チームとしても、微力ながら協力させていただければ、幸いである。



写真 36 今年の 3 月に観光公社を公式訪問した清藤会頭と三上会長